

英国海軍軍医・検梅医ニュートンとその梅毒病院、そして梅毒言説

近代日本梅毒の文化史

福田 眞 人

はじめに

- 一・ニュートンの検梅運動
- 二・軍隊の梅毒という問題
- 三・ニュートンの梅毒言説の分析・考察

はじめに

日本で行われた梅毒検査（梅検）は、万延元年（一八六〇）に長崎の稲佐郷の娼妓に始めたのが最初であろう。それまで日本では、梅毒⁽¹⁾は医者が問題にしていたとしても、社会的には問題ではなかった。つまりたとえば江戸時代、武士から町人まで、梅毒はあまねく浸透していた。殷賑を極めていたと言ってもいいだろう。

う。⁽²⁾

むしろ、日本に梅毒が多いのを問題にしていたのは、日本を訪れた外国人だった。その後の日本における検梅の定着に功績のあった二人の英国人の内の一人は薩摩藩（島津家）で働いていたウィリス（William Willis, 1837-94）である。もう一人は、横浜に上陸した英国海軍の軍医だったニュートン（George Bruce Newton, 1836-71）である。ウィリスについては既に別稿で論じた。⁽³⁾

本稿では、ニュートンの日本での活動と、その後の日本人の間でどのように評価されたかを、またニュートンの梅毒に関する言説を検討する。実地の梅毒検査に当たったニュートンは、英国で訓練を受け最先端の知識・情報を得ていたはずである。その一端を垣間みることにしよう。

一・ニュートンの検梅運動

幕末・明治維新期に來日し活躍した検梅医としての英国海軍軍医ニュートンに関しては、外国人であったということもあり、外務省に相当程度の資料が保管されている。それは、主に飯倉にある外交史料館にある。⁽⁴⁾

ニュートンは、英国本国における陸海軍の新しい施策としての梅毒対策に呼応して、慶応三年（一八六七）日本に派遣された。軍歴は未だ詳細が不明だが、來日の九月に横浜吉原町（現在の横浜市中区長者町）町会所を仮病院として遊女の検診（梅毒検査、検梅）を精力的に行った。⁽⁵⁾

この英国軍、フランス軍の派遣に関しては、要するに異国の地における自国人の保護という名目であったが、そこにはなおインドやアフリカを植民地としていた英仏両国のアジア、日本への野心があったことはほぼ察しがつくことである。

その辺りの事情を、陸軍軍医総監を経て、今や中央衛生会会長となり貴族院議員男爵となった石黒忠恵^{ただのり}（一八四五—一九四一）⁽⁶⁾が、明治三十八年四月三日月曜日に、東京本郷中央会堂にて行われた日本花柳病予防会発会式で述べた祝詞の中に探ってみよう。

我邦の先輩の人々の遺書を読みましても黴毒の療治を致しま

したし、又近くは西洋の醫書に依つても黴毒の療治を致して、黴毒の療治は進んで参りましたけれども、一般の花柳病の豫防法と云ふものはどうも聞く所はございませぬやうでございしました。然るに幕府の末年に至りまして横濱に貿易所が開かれまして外國人が段々参りますことは日々に増すと云ふやうなる有様に相成りまして、既に此英吉利と佛蘭西の両大國の公使並貿易の爲めに來つて居る人達を保護いたします爲めに兵隊をば派しまして、さうして横濱に英佛の兩國が兵を駐屯いたして居りましたが、其頃此英國の公使のパークス閣下が殊に此駐屯兵の健康のことには苦慮いたしましたことでございます。⁽⁷⁾

こうした状況下において、英国海軍軍医のニュートンが來日、まず江戸幕府に、後に明治新政府に梅毒病院の建立を願ひ出るのである。もちろんここで横浜居留地にいる自国（英仏）の民間人を保護するという名目で派兵したのは、相変わらず当時の日本がまだ尊皇攘夷の思想に染まっていたために危険が及ぶのを防ぐという意味があった。それはさておき、石黒忠恵の思い出にもう少し耳を傾けてみよう。

慶應三年に我政府は英吉利の醫者ニュートンと云ふ人の建議を容れまして横濱に檢黴法を行ふと云ふことになつて黴毒検査

院を設けまして、英吉利の醫者ニュートンと云ふ者を以て凡て監理させました。これで梅毒施行いたしまする濫觴でないかと私は考えますのでございます。それで其實行の最初には梅毒検査を受けますることは頗る之を忌避いたしまして或は自殺を以て之を避けると云ふやうなことがございましたのでございます。それで當時川越の人で松山不苦庵と云ふ人がございましたが此人と今横濱の尾上町に開業致して居る宮島義信君などがニュートンの助手として最初娼妓が検査を嫌厭することを宥めましたり慰めましたりして大層力を盡されたやうに私は記憶して居ります。⁽⁸⁾

前例のない検梅検査に、娼妓が抵抗を示したことは相当のものであったらしい。すでに見た(注一参照)、長崎の丸山遊廓(実際には稲佐郷における営業だったが)におけるロシア人向けの遊女(「マタロス女郎」、「ロシア女郎衆」)の募集と、梅毒検査の因果を含めての採用ということを考えても破天荒だったことが窺い知れる。しかし、横浜では娼妓に梅毒検査を承諾させるのに、真つ正面方法ではなく、ちょっと横から攻めるといった方法を探った人も居たのである。

或時に娼妓の梅毒検査を行ひますのに餘程困難でございま

するので、そこで或上等の娼妓を其人が馴染みましてそうしてそれを一番初めに梅毒検査を受けさせまして、そうしてから遂に其娼妓をば請出してからに、其人が自分の持物にすると云ふ結果になつたと云ふことがありますのでございます。⁽⁹⁾

ミイラ取りがミイラになつたようなものだが、そこまでして梅毒検査を広めようと努力した医師がいたのであり、そこで徐々に娼妓の間で検査が受け入れられ、広まっていたのである。

その後、ニュートンは神戸、長崎にも同様の梅毒病院設立を計画し、実際長崎で梅毒病院設立に奔走したが、いわれなき誹謗中傷を受けて、一八七一年(明治四年)七月十一日、長崎大浦海岸通七にあつたオクシデンタル・ホテルの一室で失意の内に没した。⁽¹⁰⁾

しかし、ニュートンの唱えた梅毒検査はやがて日本全体の遊廓で承認され、横浜から長崎、そして神戸、大阪、京都と広まっていたのである。

しかし、それにつけても、まだまだ話題にならないまま放置されていることがたくさんある。たとえば、「其一例を挙げますれば我帝國の陸軍の兵の梅毒に罹ります數と申します者は、先きに御師匠様といたしました所のニュートンは英吉利人でござい

ますが、此英吉利の兵の梅毒の患者よりもモット低いと云ふやうになつて居りますのでございます」という事実である。これは何故か。当時英領であつたインドからの帰路、英国の將軍は必ず日本に立ち寄り、軍医が日本の状況を羨んでいると告げたのだそうである。

何故にパークス閣下が日本に梅毒検査のことを迫られなかつたかと云へば是から申上げるやうな次第柄でございます。此席は學會のことでございますから女王のことも憚なく申しまする次第であります。此砌に英吉利の軍醫が申しますには、私の國は梅毒検査を施行することが出来ない、何ぜ之を施行することが出来ないかと云へば帝王が女帝でございます。それで婦人たるものは或部分を検査さるゝと云ふことは法令を以て出すに忍びないと云ふ御意でございますから、それで梅毒検査を出来ませぬから、已むを得ず此軍隊に我梅毒が多數になつて居ると云ふことを申されました。それで初めて此事を考え出ししました、英吉利公使のパークス閣下が色々世話をやかれた人でございまして、梅毒を検査する梅毒院を建てると云ふことは文章を以てしても言葉を以てしても迫つて居りませぬが、成ほど斯の如き譯かと云ふことが思ひ付きました。⁽¹¹⁾

英国は、中国において阿片戦争（一八四〇 四二）を行い、なお日本への帝国主義的野望を捨てていない時期だったが、明治維新の進行と共に、むしろ梅毒などの点で日本に遅れを取るようになっていたことは興味深い。

しかし、それ以上に、恐らく世界で最初に性病関係の法令としての伝染病予防法（Infectious Diseases Prevention Act）⁽¹²⁾をすでに一八六四年に発布し、これによって英国国内はもとより世界各地の海軍駐屯地でまた植民地で、英国軍兵士、水兵を相手にする娼婦、娼妓、売春婦の梅毒検査（検梅、検徴）が強制的に行われるようになった。その法令の実を挙げることに向けて改正を繰り返した国としては、その実行になかなか大きな障礙があつたことになる。それは、女性を、とりわけその生殖器を性病に罹患しているかどうかを確認するために視認する必要があつたのだが、国家の元首が女性であつたために、その実現が遅滞を来したといつのである。

幕末の日本でも、英国軍は梅毒検査を実施するように江戸幕府に求め、それはまず横浜の吉原町遊廓で実施されることが要望された。⁽¹³⁾

英国では、女権運動者バトラー（Josephine Butler, 1828-1906）が、女性に対する無差別的かつ侮蔑的性病検査を糾弾し、やがて性病予防法は廃案になった。残念ながら日本ではそのような明確

な運動は起こらなかったが、例えば英国での「青い靴下運動」(Bluestocking Movement)の影響下に「青鞥運動」⁽¹⁴⁾が行われたが、その根底にこつした女性に対する仕打ちに対する反感があったことは容易に想像できる。それは、英国で紳士淑女が築いている社会のように見えながら、男性主導の道徳(たとえば男女関係に関する男性側のダブル・スタンダード等)が罷り通っていたこと、日本で伝統的社会通念としての、男尊女卑が普通であったこととの間には、それほど大きな隔たりはなかったことを示している。

二・軍隊の梅毒という問題

ここで些か横道に逸れて、以上の言説の中から、ある一点を取り出して事実と符合するかどうかを見てみよう。それは、英国陸軍の梅毒患者が、日本の陸軍よりも統計的に多いという発言を英国陸軍の将軍がしていることである。

英国の状況を見ると、一八六四年に性病予防法が成立したものの、婦人問題、奴隷解放に関する世論が高まり、ついに婦人を侮辱するものとの意見が強くなって、ついに一八八四年に同法は廃案に追い込まれた。

その後の一九〇二年のベルギー・ブリュッセルにおける第二回花柳病国際予防会議において、英国人エルンスト氏(Dr. Ernest)

とレーン氏(Dr. Lane)が各々以下の報告をしたという。

「多くの英國病院の醫師にして花柳病患者を取扱ふ他意なし。止むを得ず彼等を収容するも出来得べき限り早く退院せしめんと務むることはなり。故に患者は初めより病院治療を斷念して所謂山師的非醫者或は誇大の廣告をなす醫師の許に治療を乞ふに至る。即ち此の如き治療にては傳染の危險には何等効果あらざるなり。人口六百萬の倫敦市に唯一のロック病院(Lock Hospital)ありて、花柳病者を収容し居るに過ぎず。同院は婦人病床百三十五、男子病床唯二十七あるのみなり。」

「賣淫婦に對し外來治療を施すことは殆ど無効なるを以て、強制的に入院治療せしめざるべからず。然れども英國に於ては之に關する法規を以て如何ともする能はざるなり。倫敦に於ては二百八十四軒の下等なる賣淫所あるも、然も一人の花柳病者を収容し得る設備なし。故に有毒者は平然として醜業を續行するの狀態にあり。又英國にては花柳病の蔓延に關する統計乏しきも、唯英國陸軍に於て賣淫者取締制度ある國との比較統計ありて大に參考とすべし。」(表1参照)⁽¹⁵⁾

確かにこの統計を見ると、(その表の意味が読み取れる情報が欠けていて、対十万人なのか、それとも千人なのか、不明なり)明

表 1 花柳病蔓延に関する統計

国	花柳	その内梅毒
英国	174.0	34.9
オーストリア	61.0	18.8
羅国	37.0	13.0
ロシア	36.1	12.0
オランダ	48.2	9.0
フランス	37.5	7.8
ベルギー	33.0	6.5
ドイツ	29.9	6.8

らかに英国が他の売春取締
(法)のある国々に較べて花柳
病患者の比率が高い。

更に記述は続いて、そこにはにわかには信じがたい恐るべき数字が並んでいる。その統計とは、一八九二年のこと
で、英国陸軍十二万六千三百
三十六人の兵卒の内、実に
五万二千百五十五人(四一・三
%)が花柳病患者だとい

である。陸軍衛戍病院には一日平均四千百九十一人の患者がある
といふことである。¹⁰⁶⁾

さらにこの種の統計を辿っていくと、英国陸軍の將軍の嘆きに
呼応する統計に出くわすことが出来る。それは、山田弘倫・平馬
庄橘著『統計より觀たる花柳病』の第九章、軍隊と花柳病に見る
ことが出来る。(表 2、3 参照)

この表 2、3 を見ると、確かに日本陸軍は、英国陸軍よりも花
柳病の割合が遥かに低く、大凡五分の一位である。しかし、同時
に海軍を見ると、英国では陸海軍に大差なく、一方日本では、七

表 2 帝国陸海軍花柳病患者比例表

年次	帝国陸	帝国海軍
明治42年 (1909)	-	139.8
明治43年 (1910)	21.2	128.8
明治44年	20.9	126.2
大正元年 (1912)	22.8	140.7
大正2年	24.7	134.1
大正3年	25.2	157.1
大正4年 (1915)	24.7	179.3
大正5年	22.0	166.6
大正6年	20.3	147.3
大正7年	20.0	119.6
大正8年 (1919)	22.6	-
平均	22.4	144.1

(兵員毎1,000比例表)

倍も海軍が多いことが分かる。この原因はなにか？

一は統計に上さるる寛恕の程度に差異があると、他は海軍に
於ける士卒の生活状態は陸軍に比し著しく趣を異にするものな
りて、豫防上諸般の取締は陸軍の如く容易ならざるもあるがあ
るためなりとす。陸軍に於て統計表に算入せらるる患者は、明
治四十二年以後に於ては其れ以外に於て縦令兵業に服しつゝ、加
療し得るものにありても、三日以上診療を受けるものは皆統計
上に上さるゝを以て、従つて陸軍に比し統計材料たるべき花柳
病患者は稍多かるべき理なり。更に洋上に於ける窮屈無趣味な

表3 花柳病兵員比率

		最大	最小	平均	年度
日 本	陸軍	25.2	20.1	22.4	1910 - 1919
	海軍	179.3	119.6	144.0	1909 - 1918
英 国	陸軍	125.0	60.0	83.0	1902 - 1911
	海軍	124.4	108.9	118.3	1901 - 1910
アメリカ	陸軍	185.1	107.8	153.6	1907 - 1916
	海軍	199.2	92.3	132.7	1901 - 1910
ド イ ツ	陸軍（プロシア）	20.6	17.8	19.0	1901 - 1910
	陸軍（バイエルン）	17.3	14.3	15.6	1907 - 1910
	海軍	101.9	62.2	72.5	1901 - 1910
フランス	陸軍	27.8	26.0	26.0	1900 - 1909

（兵員対千人比率表）

る起居は、陸上に於いて何等か慰安の道を求めんと欲するに至らしむるとは數の然べき所にして、自然酒色の巷に彷徨するもの多かるべきも首肯せらるゝ事柄なり。⁽¹⁷⁾

三・ニュートンの梅毒言説の分析・考察

英国海軍の施策に従って日本に派遣されてきた海軍軍医ニュートンには不明の点が多い。それは彼の出自、教育歴、軍歴などがまだ不明のまだからである。

しかし、明治五年に出版された彼の著書沙夕新頓著・荻野為臣関『黴療新法』（明治四年、尚古書屋蔵版）を見ると、いかにも実地で馴らした軍医らしい記述に満ちている。ここではその著書を詳細に検討することで、当時の医学的常識また治療の常套といったものを瞥見してみよう。あるいは、それが軍医の中の常識だったのかも知れないが、それは今後の検討事項としよう。

この書は、巻一（乾）が三十章からなり、巻二（坤）が三十一から三十三章よりなり、その後に「圖式小引」という名称を与えられた図版となっている。さらに最後に、ニュートンの梅毒病院に関する宣言とも言つべき「黴毒院表」を付録として加えている。まず前書きともいうべき「附言」において荻野為臣（東京箕田醫局）は、内心忸怩たる思いを次のように記している。荻野は、

五十にして志を立て、大学東校にて療術を学びつつある時、書肆佐久間嘉七が一冊の本を携えて来訪し、梅毒ノ世行ハルルヤ月二盛二年二殖シ尊卑トナク小長トナク觸ルレハ皆之ニ感受シ或ハ其状貌ヲ傷ヒ或ハ生涯ヲ過リ或ハ子孫ニ及ホス等其害勝テ數フ可カラス恐ルヘク憂フヘキノ甚シキニアスヤハ一二丁と述べて、ニュートンの著作を上梓できることを喜ぶ。

第一章は、梅毒の定義から入る。梅毒は「通常交媾ノ際ニ於テ其ノ滲出スル所ノ毒液ニ觸レテ之ヲ感受」する病の総称であるとし、その主なものは次の三つであるとする。

- (一) 淋疾（つまり淋病）
- (二) 陰部に発する瘡瘍
- (三) 同處に発する瘡瘍

しかし、現在の医学が示すように、梅毒と淋病は決定的に違つたとえばフィリップ・リコール (Philippe Ricord, 1800-1899) は、パリのミディ病院で性病病原体と目される材料を使って接種実験を繰り返して、有名な英国の外科医ハンター (John Hunter, 1728-1793) が混同していた梅毒と淋病（淋疾）を決定的に区別し、梅毒が硬性下疳から発生すること、硬性下疳は軟性下疳と臨床的に異なること、梅毒は三期に分けられることなどを示した。⁽¹⁸⁾

第一章に至ると、ニュートンは、過去四百年諸説紛々とした結

果、ついに至った医学的結論を詳細に述べる。そこでは、梅毒と淋病は異なり、淋病は粘液膜において感受（感染）し、全身に至ることがないこと、また瘡瘍に二種類あることを記す。

ここで「慢性梅毒」という概念を取り出し、その特徴として、「横痃」あるいは毒液に触れて「感傳」するとし、初膿化する小牡を発すること、さらに腫瘍は疼痛があること、そして感染の実態を次のように述べる。

第七 試二其ノ膿液ヲ取テ之レヲ獸畜ニ種レハ感傳ス

つまり、人間の梅毒患者からその膿液を採取し、動物実験をすると感染が生じることを確認している。このことは、この本が書かれる三十年ほど前に書かれたヤーコフ・ヘンレ (Friedrich Gustav Jacob Henle (1809-1885)) によつて書かれた『総合病理学読本』 (Handbuch der rationalen Pathologie, 1846-53) の中に示されていた、病原菌を同定する際に必要な三つの条件の一つだった。

ヘンレの三条件とは、以下のようなものであった。

- (一) 一定の病氣に対して、必ずある一定の微生物が存在しなければならぬ。
- (二) その微生物を分離抽出しなければならない。
- (三) その微生物で別の動物を実験的に感染させ、同じ病氣を

再現しなければならない。

この三条件は、後に結核菌やコレラ菌を発見した細菌学者コッホ (Robert Koch, 1843-1910) によって細菌発見の際のもっとも重要な三条件とされ、「コッホの三条件」(Koch's Three Postulates) と呼びなされるようになった。

第三章では、皮膚の破れた所から病毒が入りやすく、特に入浴などを怠り、身体が汚れた者に起こりやすことを説いている。

第四章では、微毒瘍は、感受(感染)してから二十四時間で、その患部が赤色になり、第二日にそこが膨張し、第三日に至って小疹となり膿液を出すという症状を観測している。

婦人ニ在テハ陰門ニ發シ、腫瘍ヨリ其ノ膿液漸々ニ流出シテ自ラ肛門ノ皺襞ニ停滯シ復タ更ニ劇痛耐ユヘカラサルノ腫瘍ヲ發シ終ニ難治ニ属スルコトアリ

ここでニュートンが治療法として述べているのは、冷水でしばしば洗滌すること、それから甘汞あるいは亜鉛華を撒布し、あるいはグリセリンなどを塗布し、阿芙蓉溶液を直腸に注入することを勧めている。

第五章では、仮性微毒瘡を説明し、治療法としては以下のもの

を列挙している。

まず身体を清潔にすること、皓礬、鉛糖、白礬石、鞣酸などを取って水に溶解し、リネンか紙片に浸し、交互に皮膚に塗布するというものであった。

以下に出てくる薬品は、いちいち上げていては切りがないが、その中で特徴的なものを列挙しよう。

開達鐵：興奮機をを催起し癒す方法に用いる。

硝酸銀錠：腫瘍もなく疼痛もなく、ただ癒えない場合に用いる。

炭酸化亜鉛と甘汞：腫瘍が潰爛し膿液が出るようになった場合に塗布。

第七章では、梅毒の症状を発し、ついに死亡した人の場合、男子は陰茎が爛蝕せしめ、婦人の陰唇あるいは会陰が腐敗し、劇痛あることあり。この場合まず嘔囉(コロシント)をもって麻醉し、烙鐵をもってこれを焼絶(焼いて絶つ)し、それから硝酸あるいは石炭酸を用いて洗滌すべしとしている。劇痛がなお続く場合は、氷片をそこに当てることを勧めている。あるいは、阿芙蓉溶液(つまり阿片溶液、モルフィネという見方もできる)を注ぐと言ふこともある。

服用薬として、阿芙蓉酒、ブランデーがあり、さらに滋養薬としては、牛肉羹汁(つまり牛肉スープ)、鶏卵、肝油などを損

取することを勧めている。⁰⁷

また、当時衛生 (Hygiene) ということが言われるようになり、清潔とか換気が健康に大きな影響があると考えられるようになっていた。

第九、十章に至って、仮性微毒瘍は約十分の三、鼠蹊部に瘀衝を生ずると述べている。治療法として、患者を寝かせ、熱湯で患部を蒸し、それで効果が得られないようなら、十一、三条の蛭を用いることと説いている。更に、患部に氷片や雪を当てることを勧めながら、沃顛酒の塗布、発泡膏の塗布、あるいは草灸を施し、それでも効験のない時は、亜麻仁油の使用を推している。その腫瘍が膨張した場合の治療法を以下に記す。

柔軟ナルヲ視レハ之レニ孔穴ヲ穿チ膿液ヲ漏泄セシムルヲ要ス今是ノ術ヲ迅速

二行ハント欲スルハ皮膚稍薄クナリテ腐蝕シ或ハサイニウセス(口小ク形長キ腫瘍ニシテ内空ナリ膿液之ニ充蓄セリ)ヲ發セントスルヲ豫防スルノ要法タリ

凡是ノ法ヲ行フニ至テ小刀ヲ以テ之レヲ穿破スル醫アリ或ハ竹葉針ヲ以テ徐々ニ之レヲ破開シ腐蝕藥ヲ取テ之レヲ刺入スル醫アレトモ余力法ノ如キハ針ヲ取テ之レニ三条ノ糸ヲ貫キ其ノ

腫瘍ヲ穿ツヲ良シトス

これは、串線法とも呼ばれ、シートン(針に糸を通し、皮膚を穿つ機器)のようになれば、二日経てば膿液がその穴から流れ出し、そこから皓礬を入れると横痃(よこね)が治癒するとしている。しかし、この串線法を実施するときは、その腫瘍より漏泄する膿液が他の皮膚部分に触れないように注意する必要がある。(図一参照)

(この項、未完)

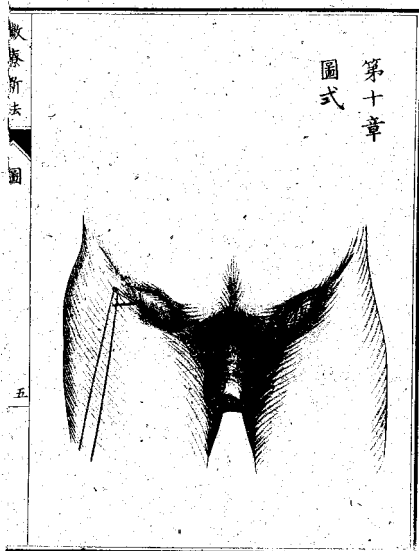


図1 串線法

(1) 注

梅毒はスピロヘータ (spirochaete pallida) の感染により引き起こされる性病で、もともと南アメリカからスペイン人によりヨーロッパに持ち込まれ、インド東南アジアを経由して十六世紀はじめに日本に広まった。一九一〇年(明治四三年)エーリッヒ (Paul Ehrlich, 1854-1915) と秦佐八郎(一八七三—一九三八)により化学療法薬のサルバルサンが見いだされるまで、世界中で年々数百万の人々の人生を蹂躪した。秦は伝染病研究所に約十年、その間日露戦争にも従軍、後ドイツ留学。秦はドイツに三年、特に国立実験治療研究所ではエーリッヒ博士を助

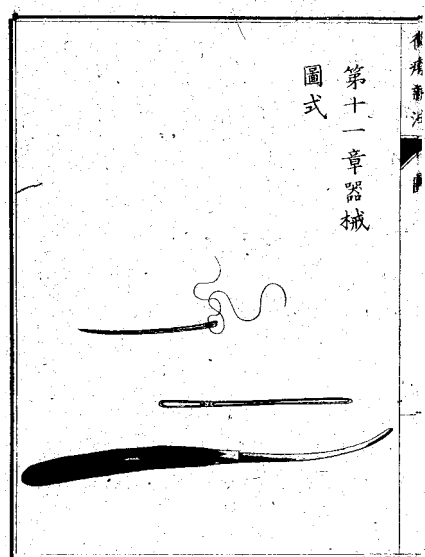


図2 膿を取るための道具

けて梅毒に対する特効薬の研究に没頭し、ついに世界初の化学療法剤サルバルサン(「救う」の意)六〇六号を発見した。

(2) 「瘡けと自惚れのない者はない」とさえ言われていた。若狭小浜藩医で蘭方医の杉田玄白(一七三三—一八一七)は、前野良沢らと『解体新書』(一七七四)を訳したことで知られているが、その随筆『形陰夜話』

(一八一〇)の中で次のように述べている。「病者は日々月々に多く毎歳千人餘りも療治するうちに七八百は梅毒家なり」(『随筆文学全集』第七巻、二三五頁)。

(3) 拙稿「検梅の始まりと梅毒の言説 近代日本梅毒の文化史」、『言語文化論集』第XXV号、第1号、一—一五頁参照、二〇〇三年一月。

(4) この事についてはすでに拙稿「梅毒の文化史的研究序説」、『東と西の医療文化』で述べた。この前後の事情については以下の文献が参考になる。古賀十二郎『西洋醫術傳來史』三三三—四一〇頁。中西淳朗「横浜における梅毒とその治療史」5、『皮膚病診療』Vol.22, No.1, No.5, 協和企画、平成二年(二〇〇〇)。中西淳朗「近代横浜医学のあゆみ」三三(二〇〇一)。大川由美「近代検徴制度の導入と英国「伝染病予防法」」、『日本歴史』第六三三号、七一—八七頁、平成二年(二〇〇〇)。

福田眞人「梅毒の文化史的研究序説」、酒井シヅ退官記念論文編集委員会『東と西の医療文化』思文閣書店、2001年5月。

(5) 明治六年(一八七〇)に、遊廓が吉原町から高島町へ移転し、病院も高島町へ移動した。病院は高島町九丁目、現在の西区高島町にあたる。

(6) 石黒忠恵 弘化二年(一八四五) 昭和十六年(一九四一) 享年九七才。現在の新潟県小千谷市片貝町で下級武士の子として生まれ、苦学して明治四年陸軍軍医となる。軍医制度の創設に尽力。明治三年陸軍

軍医総監。陸軍軍医部で隠然たる勢力をふるう。その後第四代日本赤十字社社長となる。一八七七（明治一〇）年九月に、第四回赤十字国際会議が、ドイツのカルスルーエで開催された。この時、はじめて日本の赤十字も国際会議に参加。政府の代表は石黒忠恵、赤十字の代表は松平乗承^{のり}だった。またドイツ語の通訳を務めたのは、当時陸軍の石黒忠恵に命ぜられて食糧・住居問題を研究するためドイツに留学中だった森林太郎こと森鷗外だった。これは海軍軍医の高木兼寛一八四九—一九二〇）が、脚気（beriberi）は食糧によると述べ、米食に代わり麦食を推奨していたことに對し、陸軍は住居問題であると主張していたからである。まだビタミンB不足が、脚気の原因であることが分からなかった時期の話である。ビタミン（vitamin）という考えは、フンケ（Casimir Funk, 1884-1957）が一九一一年に、身体に不足すると病気になるとした新しい化学物質の発見するまで待たなければならなかった。フンケは、ポーランド生まれで、アメリカに移住した科学者。

明治一五年（一八八七）に高木は有志共立東京病院を設立し、また海軍医大に任ぜられている。この年、海兵の脚気予防対策につき、天皇に拝謁し奏上している。

- (7) 日本花柳病豫防會『日本花柳病豫防會報告』一六—一七頁。
- (8) 同上、一七頁。
- (9) 同上、一七—一八頁。
- (10) ニュートンの葬儀に関しては、新聞『ノース・チャイナ・ヘラルド』*The North China Herald*の一九一一年七月二十一日号に以下の記事有り。
 “The funeral of Doctor Newton, whose death I briefly informed you of by the last steamer, took place on Tuesday. It was attended by almost resident in the place, by officers from all the men-of-war in harbour, by the Consular body

and by a large detachment of the men from *Alma, Almaz* and *Tordenskjold*, whose Bands, playing alternately most appropriate music, gave an imposing effect to the ceremony. This melancholy and sudden death will probably postpone for some time the establishment of the Lock Hospital here; and it will be for Dr. Newton's successor to overcome the prejudices of the natives, who seem persistently to have set their faces against the system, which has worked so well in the North.”
 ニュートンの墓は、現在長崎の大浦国際墓地にある。長崎は元亀元年（一五七〇）に開港し、翌年にはポルトガル船が入港した。鎖国時代においても出島を通して世界に開かれた貿易港としての役割を果たした。ただし入国できる国名は限定されていた。ドイツ人が、オランダ人のかたつて来日するということは相当あったようである。中国人は、稲佐の悟真寺を菩提寺としてきたが、後にその一角がオランダ墓地として割り当てられた。鎖国が終わり、文久元年（一八六一）に英国領事が先頭に立つて、川上町に広さ三、七七八平方メートルの五段造りの大浦国際墓地が造成された。現在一七六基一八九人が葬られ、ニュートンも二二一人の英国人と共に眠っている。なお、大浦国際墓地は、明治二一年（一八八八）に閉鎖された。

- (11) 日本花柳病豫防會、同書、一九頁。
<http://www.bjh.wakwak.com/~cdc/nagasaki/ouraic/>
- (12) 一八六四年には最初の「伝染病（性病）予防法」。これは英国の十八の街で兵隊や船乗りが出入りする売春宿を組織的に取り締まるというものであった。その中で、嫌疑をかけられた女性（娼婦）は、拘留され、医学的な検査も無理矢理受けさせられるといったものだった。また自分が無実であることを立証できないと、その女性は娼婦として登録され、定期的に医学検査を受け、性病に罹患しておれば、快癒したことが医者

に証明されるまで性病病院 (lock hospital) に拘留されることとなった。つまり、女性の権利は明らかに軽視され蔑ろにされていた。

さらにこの後に、第二次 (一八六六年)、第三次 (六九年) の伝染病 (性病) 予防法が議会を通過し、その結果どのような女性でも梅毒検査を受けさせられる可能性が残った。

もつと事態を複雑にしたのは、まずこの法令が男の患者の診察を含んでいなかったことであり、さらに警察が誰が娼婦であるかを決定できる徹底的な権力を与えられたことである。また、警察は捜査令状も相当の根拠の開示もなく娼婦の疑いのある女性を署へ連行することができた。すると女性は嫉妬からの密告や、外観が娼婦に類似しているという理由だけで、拘留される可能性があった。

この娼婦ならびに女性一般に対する差別的処遇が、後の女権運動 (feminist movement) の重要な契機になったことを別稿で検討する予定である。

(13) この経緯に関しては、永見文太郎『検徴制度の沿革』(『明治大正賣笑風俗史分冊』および大川由美『近代検徴制度の導入と英国「伝染病予防法」』、『日本歴史』第623号、pp.71-87に詳しい。

(14) 明治四四年 (一九二一年) に平塚らいてう (一八八六 - 一九七一) を中心に組織された女流文学者の一派。機関誌『青鞥』によって婦人の開放、婦人の参加権を唱導し、多くの「新しい女」を擁した。他に神近市子、伊藤野枝など。

(15) 山田弘倫、平馬左橋『統計より観たる花柳病』三四 五頁。

(16) 同上、三六頁。しかし、その記述の直後に以下の引用あり。
「英國政府より印度政廳に通牒せる文中の一節に曰く『我軍隊は千八百七十六年乃至千八百八十五年間には、花柳病の数毎年平均二五・八%

なりしが、其の後十年間に四四・三%に増加し、千八百九十六年には五二・一%となれり。實に花柳病の蔓延は軍隊の過半に達せり。醫師會よりの報告を見るも、他列國の陸軍に於ける豫防規則の効力は争ふべからざるものありて最も惡しき時獨軍〇・五五%、葡軍一・四八%なるに印度に於ける我軍は一七・五%に達せり。」

(17) 同上、二二頁。

(18) しかし、すでに一七九三年にベル (Benjamin Bell, 1749-1806) が、彼の著書『淋病と梅毒について』(Bell, Benjamin, *A treatise on gonorrhoea venerea and lues venerea*, Dublin: W. Jones, 1793) の中で、梅毒と淋病は異なることを明確に示していたのである。フランス海軍が十八世紀からローブ (Roob) と称する抗梅毒薬を海軍の専売薬として使用していたことから知られるように、伝統的に海軍と梅毒は切り放せない。また、梅毒の治療は伝統的に外科医の仕事だった。たとえばフィリップ・リコール (Philippe Ricord, 1800-1899) は、パリのミディ病院で性病病原体と目される材料を使って接種実験を繰り返し、有名な英国の外科医ハントナーが混同していた梅毒と淋病 (淋疾) を決定的に区別し、梅毒が硬性下疳から発生すること、硬性下疳は軟性下疳と臨床的に異なること、梅毒は三期に分けられることなどを Ricord, Philippe. *Traité Pratique des Maladies Vénériennes*. Paris: De Just Rouvier & E. Le Bouvier; 1838. [Translated in: Ricord Philippe. *A practical treatise on venereal diseases; or, critical and experimental researches on inoculation, applied to the study of these affections, with a therapeutical summary and special formulary*. New York: P. Gordon; 1842, p. 80.] の中び示した。

(19) この当時の常套的治療薬。栄養療法であり、結核などの治療にも使われた。栄養療法としては、牛乳、牛肉スープ、卵、鱈肝油 (cod liver

③) などがあり、さらに葡萄療法、ワイン療法、アイスクリーム療法などがあったが、自然の恩恵としての氷療法があったことを知るべきである。つまり、痛みや苦しみを和らげる方法としての、快適なアイスクリームや氷菓子があったと考えられる。正岡子規の療養日記としての『仰臥漫録』などが興味深い。

【文献表】

【和文献】

- アダム(瀬野文教訳)『性病の世界史 王様も文豪もみな苦しんだ』草思社、平成十五年(二〇〇三)° (Adam, Brigit, *Die Strafe der Venus*, Obis Verlag, Muenchen, 2001.)
- 石垣豊之介『博愛堂』、明治二十六年(一八九四)°
- 石川光昭『結核・梅毒・犯罪』吐鳳堂、昭和一六年(一九四一)°
- ウィリス(Wilima Willis, 三田村惟一訳)『梅毒新論』鹿児島縣病院蔵版、明治五年(一八七三)°
- 大越正秋『性病と性器疾患』創元社、昭和三五年(一九六〇)°
- 太田久好(石井光太郎校訂)『横浜沿革誌』、明治三五年(一八九二)刊行、有隣堂、昭和45年(一九七〇)°
- 岡上甲子之介『男女必携梅毒鑑査法』三成社、明治三三年(一八九一)°
- オシエ『音楽と病：病歴にみる大作曲家の姿』法政大学出版会、平成八年(一九九六)° (O'Shea, John, *Music and Medicine: Medical Profiles of Great Composers*, J.M. Dent, 1990.)
- カッテンディーケ(水田信利訳)『長崎海軍伝習所の日々』平凡社(東洋

- 文庫26)昭和三九年(一九六四)° (Katendyke, Willem Johan Cornelis Ridder Huysen van, *Uitbreidings uit het dagboek van W. J. C. Ridder H. V. Katendyke gedurende zijn verblijf in Japan in 1857, 58 en 1859*, 'sGravenhage 1860)
- 如谷春郎『江戸の性病：梅毒流行事情』三書房、平成五年(一九九三)°
- 楠瀬恂編『随筆文学選集』第七巻、書齋社、昭和二年(一九二七)°
- ケテル(寺田光徳訳)『梅毒の歴史』藤原書店、一九九六年° (Claude Quétel, *Le mal de Naples : Histoire de la syphilis*, Editions Robert Laffont, S.A., Paris, 1986)
- 古賀十二郎『丸山遊女と唐紅毛人』2巻、長崎文献社、昭和四三年(一九六八)°
- 古賀十二郎『西洋醫術傳來史』形成社、昭和四七年(昭和一七年版復刻版)°
- 今野信雄『江戸の風呂』新潮社、平成元年(一九八九)°
- 酒井シヅ『日本の医療史』東京書館、昭和五七年(一九九二)°
- 酒井シヅ編『疫病の時代』大修館書店、平成一一年(一九九九)°
- 菅野虎太『梅毒亡国論』大森弁吉、明治二八年(一八九六)°
- 図説横浜の歴史編集委員会『図説横浜の歴史』横浜の歴史編集委員会、平成元年(一九八九)°
- 立川昭二『病気の社会史：文明に探る病因』ニエックス、昭和四六年(一九七一)°
- 立川昭二『江戸 老いの文化』筑摩書房、平成八年(一九九六)°
- 立川昭二『江戸 病草紙』筑摩書房、平成一〇年(一九九八)°
- 築地居留地研究会『築地居留地1、2：近代文化の原点』築地居留地研究会、平成二一、一四年(二〇〇〇、二〇〇一)°

デソウィッツ(藤田紘一郎監訳、古草秀子訳)『コロンプスが持ち帰った病氣 海を越えるウイルス・細菌・寄生虫』翔泳社、平成十一年(一九九九年)。(Robert S. Desowitz, *Who Gave Pinta to the Santa Maria? Torrid Diseases in a Temperate World*, W. W. Norton & Company, Inc., 1997.)

寺田光徳『梅毒の文学史』平凡社、平成十一年(一九九九年)。

土肥慶三『世界梅毒史』形成社、昭和四十八年(一九七三年)。

東京都都政資料館『築地居留地』(都史紀要4)東京都、昭和三年(一九五七)。

中西 啓『長崎のオランダ医たち』岩波書店(岩波新書)、昭和五〇年(一九七五)。

永見文太郎『検徴制度の沿革』(『明治大正寛政風俗史分冊』)東京興信新報社、1932年。

日本花柳病豫防會『日本花柳病豫防會報告』明治三十八年(一九〇五年)。

ニュートン(George Bruce Newton)『荻野為臣訳』『徴療新法』尚古書屋、明治四年(一八七一)。

服部敏良『江戸時代医学史の研究』吉川弘文館、昭和五三年(一九七八)。

早川政之助(東泉生筆記)『娼妓規則義解』本人発行、明治二十七年(一九一五)。

福田眞人『梅毒の文化史的研究序説』酒井シツ退官記念論文編集委員会『東と西の医療文化』思文閣書店、平成十三年(二〇〇一年)。

ベル、シャノン(山本民雄・宮下鎮夫・越智道雄訳)『売春と性思想』青弓社、平成十三年(二〇〇一年)。(Shannon Bell, *Reading, Writing, and Rewriting the Prostitute Body*, Indiana University, Bloomington, 1994.)

松本順・長与専斎(小川鼎三・酒井シツ校注)『松本順自伝・長与専斎自伝』平凡社(東洋文庫386)、昭和五五年(一九八〇)。

山田弘倫・平馬左橋『統計より觀たる花柳病』南山堂書店、大正一二年(一九二二)。

山根正次『梅毒蔓延論』洲崎遊廓事務所、明治一十七年(一八九五)。

山本俊一『梅毒からエイズへ…売春と性病の日本近代史』朝倉書店、平成六年(一九九四)。

横浜開港資料館・財団横浜開港資料普及協会『史料でたどる明治維新期の横浜英仏駐屯軍』横浜開港資料館、平成五年(一九九三)。

渡辺信一郎『江戸の女たちの湯浴み 川柳にみる沐浴文化』新潮社、昭和六一年(一九八六)。

【洋文献】

Arrizabalaga, Jon, John Henderson and Roger French, *The Great Pox : the French Disease in Renaissance Europe*, Yale University Press, 1997.

Baumgartener, Leona and John F. Fulton, *A Bibliography of the Poem Syphilis, Sive Morbus Gallicus by Girolamo Fracastoro of veroma*, Yale University Press, New Haven, 1935.

Cartwright, Frederick F., *Disease and History*.

Eatough, Geoffrey, *Fracastoro's Syphilis: Introduction, Text, Translation and Notes*, Francis Cairns, Liverpool, 1984.

French, Roger and Jon Arrizabalaga(etal eds.), *Medicine from the Black Death to the French Disease* (The History of Medicine in Context), Ashgate, Aldershot, 1998.

Hayden, Deborah, *Pox: Genius, Madness, and the Mysteries of Syphilis*, Basic Books, N.Y., 2003.

Hayes, Jo N., *The Burden of Disease: Epidemiology and Human Response in*

- Western History*, Rutgers University Press, 1998.
- Jones, James H., *Bad Blood: The Tuskegee Syphilis Experiment*, The Free Press, Maxwell Macmillan International, 1981.
- Landau, Elaine, *Sexually Transmitted Diseases*, Enslow Publishers, Aldershot, 1986.
- Merrans, Linda E.(ed.), *The Secret Malady: Venereal Disease in Eighteenth-Century Britain and France*, The University of Kentucky, 1996.
- O'Shea, John, *Music and Medicine: Medical Pygflies of Great Composers*, J.M. Dent, 1990.
- Spongberg, Mary, *Feminizing Venereal Disease : The Body of the Prostitute in Nineteenth-Century Medical Discourse*, Macmillan Press, 1997.
- Walkowitz, Judith R., *Prostitution and Victorian Society: Women, Class, and the State*, Cambridge University Press, 1980.

【雑誌掲載論文】

- 今井忠宗「我國検徽駆徽の端緒」、『千葉医学専門学校校友会雑誌』Vol.72, pp.307-332, 大正四年（一九一五）。
- 大川由美「近代検徽制度の導入と英国「伝染病予防法」」、『日本歴史』第63号, pp.71-87, 平成二二年（二〇〇〇）。
- 竹中祐典「横須賀製鉄所医師P.A.L.サヴァチエの医学基盤」、『医学医学資料研究』第30号, pp.1-15, 平成二二年（二〇〇〇）。
- 中西淳朗「横浜における梅毒とその治療史」、『皮膚病診療』Vol.22, No.1-No.5, 協和企画, 平成二二年（二〇〇〇）。
- 中西淳朗「近代横浜医学のあゆみ 松山棟庵と松山不苦案義定」、『郷土神奈川』神奈川県立図書館, 平成二三年（二〇〇一）。

- 福田眞人「検梅のはじまりと梅毒の言説 近代日本の梅毒の文化史」、『言語文化論集』第XXV巻, 第1号, pp.1-15, 平成二五年（二〇〇三）。
- A.W.Crosby, Jr., "The Early History of Syphilis: A Reappraisal", in *Culture, Disease, and Healing: Studies in Medical Anthropology* (Ed. by David Landy), Collier Macmillan Publishers, London, pp. 107-113, 1994.
- Mays, Simon, Gillian Crane-Kramer, and Alex Bayliss, "Two Probable Cases of Treponemal Disease of Medieval Date From England" in *American Journal of Physical Anthropology*, 120: 133-143(2003).